

足利風

ashikaga-fu

2026
冬号
Vol.96



画：伊村恵利佳
書：風喜人

足利市民活動センター

開館時間：平日 10:00～19:00

休館日：土・日・祝日・第3月曜日

〒326-0052

栃木県足利市相生町1-1

マルニ額縁生涯学習センター3F

TEL 0284 (44) 7311

FAX 0284 (44) 7312

HP <http://www.shimin-act.jp>

HP QR コード



☆ ご案内 ☆

* 特集！

「大切なものは、目には見えないんだよ・・・」

* 言葉のあやとり

「Stay Hungry, Stay Foolish」

* 私のボランティアことはじめ

「足利旧市街地に息づく時の層（下）」

* マチのちゃぶ台

「ふたたびの四国路へ」

* INFORMATION

* 特集！ *

「大切なものは、目には見えないんだよ・・・」

漂泊の人・西行に憧れるのは芭蕉をはじめとして今日まで数多い。その西行には“桜”をはじめとして“月”を詠んだ歌も多い。～かかる世に影も変わらず澄む月を見る我が身さへ恨めしきかな～雲の上や古き都に成りにける澄むらむ月の影はかはらで・・・

ある女性染織家と“月”にちなんだ美しい文章がある～色は、心に届く。色は、世界に降り注がれる“光”の化身。魂を震わせる宇宙からの寄せ来る波。もともと色という言葉は、内にあるものが外に匂い出るような趣のことであるという。そして、異質なものの、両極のもの同士が出会うところに、抗えないほど強力な磁力が生まれ、反発しつつ強烈に引き合い解け合い色が生まれる。月と地球の関係も、実はとても“色”に関わり深い。この染織家も、月の満ち欠けの暦を基に、草木から色を抽出し、鉱物で染め上げて紡ぎ、それぞれの反物に映し出してゆく。樹液が満ち実りを育むサイクルと、月の巡りは、色の誕生に深く関わっている、という。～月と地球の関係が誕生して間もない頃、月の周りに漂う鉱物が、一斉に地球をめざし、隕石となって降り注いだ時代があった。宇宙の石は燃える火の玉と化し、まだ海水しか存在しなかった地球に猛進した。そして、奇跡は起きた。何千度という熱を帯びた鉱物と海水の元素が合体し、初めて地球に“アミノ酸”というものが創られた。生き物の主成分、生命現象を司る“タンパク質”の誕生。私たちの命のカギは、脈動や体温とは無縁に思える無機質・無生物とされる鉱物が握っているということ。それは新鮮な驚きでもある。・・・「私たちは・・・星屑なんです！」。闇に瞬き、心に希望を灯す星々こそが私たち。月星が輝く天を見上げる時、いつかは還る場所として言い知れぬ懐かしさを感じる所以は、きっとここに在るのだ。

宇宙から届く光の波を浴び、月が操る血潮の干潮に導かれ、私たちはそれぞれの個性で、この世に“色”の華を咲かせる使命を担った星々の種子なのだ。月と地球のつきあいは46億年。かつての月は地球に、より近く、今より遥かに強い潮汐力を地球に投げかけ、劇的な潮の満ち引で、海から陸へ、生き物に進化を迫った、という。

「星があんなに美しいのは、そこに目には見えない花があるからなんだよ」

「砂漠が美しいのは、どこかに井戸が隠されているからさ」・・・などなど、“星の王子さま”のセリフは美しい。この世のすべての存在が、尊厳性を持つのは、その内側に、目には見えない“仏性”を秘めているからです。NPOやボランティア活動に関わる者は、そのことを身に沁みて感じなければ・・・と、思うこと切なるものがあります。 (M生)



* 言葉のあやとり *

Stay Hungry, Stay Foolish (ハングリーであれ！ 愚直であれ！)

コンピューターメーカー・アップル創業者 スティーブ・ジョブズが2005年に、スタンフォード大学で行なったスピーチ。彼は大学にも通わず、出自も複雑なものだったが、世界の価値観を変えてみせた。日本の禅にも深い関心を持っていた。

私のボランティアことはじめ

「足利旧市街地に息づく時の層」(下)

— 鏝阿寺と人々のいとなみ —

NPO 法人足利歴史まちづくりの会 理事長 沼尻了俊

現代のまちづくりにおいて、こうした過去と現在が重なり合う街の風景を「再生」していくには、単に建物やインフラを整えるだけでは不十分である。この地に住む人々の思いや記憶に寄り添い、それらを未来へと紡ぐ意識が必要だ。足利旧市街地にある「風景」とは、単に見るための景色ではなく、人と場所が互に関わり合い、時間を超えて形成してきた「共鳴」のような存在である。ここを訪れる人々は、ただ景観を見るだけでなく、そこに染み込んだ過去の記憶と、今を生きる人々の営みが響き合う「風土」としてこの街を感じ取ることができる。こうして、鏝阿寺や足利学校と共に在る足利旧市街地の風景は、変わり続けながらも変わらないものを私たちに伝え続けている。街と人が共に刻んできた時の層が、新たな世代にもそのまま引き継がれ、次の未来へと静かに繋がっていく。その時、私たちはこの地の「心」を改めて感じるだろう。

この地に積み重ねられてきた時間の層は、まるで静かに呼吸するように街全体に染み渡り、そこを訪れる人々を包み込んでいる。そして、今回の写真展示では、この場所に宿る「記憶」と「営み」を改めて見つめ直す機会を提供する。写真に映る風景は単なるイメージではない。それは、鏝阿寺を中心に長い年月を経て形成された風土そのものの一部であり、人々と街が織り成してきた物語を写し取ったものだ。

この展示を通じて、私たちは足利旧市街地に息づく時間の深さを感じ取ることができるだろう。同時に、変化し続ける街の姿の中に、変わらない街の「心」を見出すことができるはずだ。写真に捉えられた一瞬の中に刻まれた歴史、日常、そして未来への希望。それは、これからも人々と街が共に歩み続けていく証として、この展示を訪れる人々の心に響き、次なる世代への記憶として受け継がれていくだろう。私たち一人ひとりが、写真を通じて見える街の姿にどのように関わり、どのような未来を共に紡いでいけるのか。今回の展示がその問いを生むきっかけとなることを願い、この地の「過去と現在と未来」に触れるひとときを共有したい。



マチのちゃぶ台

「ふたたびの四国路へ」(八十八ヶ寺巡礼の旅)

木村寛

2024年11月15日、飛行機は30分ほど遅れて羽田を出発、午前8時30分頃高松空港へ着いた。うるう年限定・逆うち四国八十八ヶ寺全周14日間のツアー〈21人〉の始まりである。顧みれば10年前、平成26年(2014年)66歳の時に同様のツアー(順うち)に初めて参加した。31歳で、病気で他界した息子の供養が目的であった。今回は、息子のほか両家両親の供養も目的であった。バス、タクシー、徒歩で、1日5~10寺を参拝する。約6千~1万歩毎日歩く。この行程は、10年前と比べ、なかなか大変だった。自分の体力の低下を認めざるを得ませんでした。特に、3日目の弥谷(いやだに)寺の364段の登の石段と長い坂道は、登山と同様で、苦しい参拝となった。11日目、逆うち元祖衛門三郎終焉の地放杉庵に参拝し、神山温泉へ。その夜、高熱と、のどの痛みを発し、残り3日を残して、大事をとって帰郷した。その後、10日ほど休養し、健康を回復したが、ほろ苦い思いが残った今回の参拝となった。



INFORMATION *

※書「足利風」の風喜人さんが、京セラ美術館の出展作で、京都府知事賞を受賞されました！！

☆「まちの縁側」～読書サロンへのご招待～

だれにでも心に残る一冊の本があります。童話・小説・詩集・・・等々。
その一冊の本を導きの糸として、案内人を囲んで、参加者のみなさんと一緒に、
ワイワイガヤガヤ・・・と。新しい人との出会いや物語を紡いでみませんか。

★令和8年1月16日(金) PM2:00～4:00

* 本 : 「歌集『キリンの子』」(鳥居)

* 案内人 : 関口 尚子 さん

★令和8年2月20日(金) PM2:00～4:00

* 本 : 「星の王子さま」(サン＝テグジュペリ)

* 案内人 : 武田 悠利 さん

★令和8年3月13日(金) PM2:00～4:00

* 本 : 「柳 宗悦」(若松英輔)

* 案内人 : 鈴木 光尚 さん

■参加費：無料

■会 場/問い合わせ：足利市民活動センター ☎ 44-7311

☆「企画展」(交流コーナー) (土・日・祝日・第3月曜日は休館日)

* 1月 5日(月)～1月15日(木)	NPO法人 BROTHER-HOOD 展
* 1月20日(火)～1月29日(木)	写真展～武政喜一&仲間たち～
* 2月 2日(月)～2月12日(木)	寺カフェ仲間の作品展
* 2月17日(火)～2月26日(木)	NPO法人ガッツの会展
* 3月 2日(月)～3月12日(木)	東日本大震災 15周年展
* 3月17日(火)～3月26日(木)	「足利風」原画展

※展示時間・・・10:00～19:00 ただし最終日は15:00まで

☆「相談室」

* 相談室 = 1月14日(水) 14:00～16:00 「国際交流の現在(いま)」
2月 4日(水) 14:00～16:00 「ピースサポート流まちづくり」
3月11日(水) 14:00～16:00 「『被災地支援』を考える」

編集後記

京都に行くと「美山荘」も良いけれど、まず「河井寛次郎」記念館に行く」という佳人がいる。「民藝」という言葉が生まれて百年。中心人物は柳 宗悦(やなぎ・むねよし)だが、濱田庄司(益子焼)とともに支えたのが京都の陶芸家・河井寛次郎。「暮らしが仕事、仕事が暮らし」の名言がある。人間国宝・文化勲章に推されても応じず、一陶工として生涯を終えた。柳を評して「道を歩かない人。歩いたあとが道になる人」～柳の民藝活動を真に支えたのは、声楽家の妻・兼子だと私は思っているが、「河井寛次郎」記念館の静謐さと志の高さに感銘を受けているのは、私だけでは・・・ない。(カサブランカ)